

# 猫養通信

第 116号  
特大号  
令和四年  
(2022年)  
4月15日発行  
(年4回発行)

大江戸吟行会・新吉原編  
宇田川肇

私は考古学的手法をもって調査対象地の歴史を呼び覚まし、情報として本の中に記録保存することを生業としています。江戸時代が専門ですので、主に都内の発掘調査に従事しています。

令和二年末頃に台東区千束二丁目地内(竜泉寺遺跡)、お西さまで有名な鷲神社の別当寺長国寺境内墓地の調査を行いました。下の写真、右上は幕末から明治期の在地製骨壺です。写真下は幕末期の方形木棺で、写真左上は瀬戸美濃系の徳利です。容量は約二合半です。故人はお酒が好きだったようで、ともに埋葬されています。都内では、普通の民家の下に墓地が残っていることは珍しいことではありません。

長国寺(長谷寺)は新吉原に最も近い寺であることから、新吉原についても遺跡業務の範囲内で調査を行いました。その結果、新吉原について多少は詳しくなりました。

僅か三三〇メートル四方の空間と町割りが開発当時から現代にいたるまでほとんど変化していない新吉原は、三六〇年以上も遊郭であり続



在地製骨壺



右の方形木棺下部中央に見えるのが、上の瀬戸美濃系二合半(こなから)徳利

けているばかりか、日本の芸術、文化、社会制度、心性に影響を与えている極めて珍しい場所です。このような特殊な場所には人間の喜怒哀楽が凝縮して染み付いているので、わずかな痕跡からでも当時の人の生々しい息遣いを感じる事ができるものです。風狂の魂を宿し、森羅万象の相に明敏な連句人の方々をお連れして、一座を開いてみたらどのようなものになるのだろうか? といったずら心が沸き上がり、身近な方をお誘いしたところ、十五名の参加を得ることができましたので、令和三年十一月十四日(日曜日)に吟行会を開催しました。  
午前十時、鷲神社境内に集合、ちようどお西

## ●目次●

▼大江戸吟行会・新吉原編	宇田川肇	1
▼遠輪廻とは何か	鈴木千恵子	3
◎第百五十八回例会		
令和四年初懐紙作品	二十韻六巻	4
◎第百五十七回例会		
令和三年芭蕉忌・明雅忌作品	源心五巻	6
◎第百五十六回例会		
令和三年猫養会総会作品	歌仙五巻	8
▼心敬僧都に学ぶ		
◎令和三年同人会総会作品	歌仙五巻	11
▼時事句はなぜ「おぞましい」のか	鈴木了齋	13
◎第六回猫養会リモート	歌仙二巻二十韻一卷	16
◎第五回猫養会リモート	二十韻五巻	17
◎第三十六回国民文化祭わかやま2021		
連句部門 会員受賞作品三巻		
一般社団法人日本連句協会会長賞		
二十韻「五殿の千木」	白崎ひろ子 捌	19
和歌山県の連句を育てる会会長奨励賞		
二十韻「初日の出」	杉本聰 捌	19
ジュニアの部 文部科学大臣賞		
表合せ六句「三が日」	鈴木千恵子 指導	19
▼事務局だより		
20		

さまの時期でしたので、鳥居には大きな熊手が飾られていました。旧吉原病院を左手に見て搦め手から新吉原のメインストリートである仲ノ丁(町)通りへと入ります、江戸時代には引手茶屋が軒を連ねていましたが、今ではコンビニや喫茶店(案内所)、中級店が並んでいます。ひやかして歩いていますと「社長どうですか?

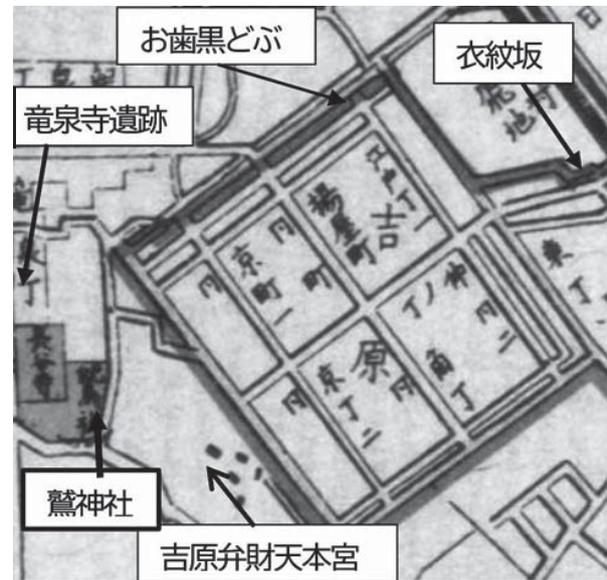
寄つてきませんか」と声を掛けられ「今日は仕事なの」と軽くないなして通り過ぎるのも慣れたものなのですが、一行の中には少なからず驚かれた方も多かつたようです。

さすがに現代では格子店などはありませんが、中華風、パレス風、メルヘン風、時代劇風の店構えなどを批評しつつ、時折ドアの間隙から鏡張りの内装を覗き見るのも一興です。吉原散歩を楽しむ女性観光客の姿が写る明治時代の絵葉書が残っています。老若男女を問わず悪所というものは人を引き付けるものようです。

S字カーブが特徴の衣紋坂から見返柳を過ぎ、江戸丁一前の吉原公園内で休憩です。新吉原と外界は堀と木塀によって隔てられています。堀の幅は江戸時代中期には四メートル弱ありましたが、明治時代には一メートル弱にまで縮まり、何時の頃からかお歯黒どぶと呼ばれま



関東大震災慰霊吉原観音像前にて



吟行地周辺の古地図

した。お歯黒どぶの石垣は一部残存しています。休憩の後に揚屋町通りから引き返し、吉原弁財天本宮にお参りします。新吉原は田地に二

メートル近くの盛土をして造成されました。その際に残された池に弁財天が祀られ、楼主たちの信仰を集めました。大正十二年の関東大震災では多くの人々がこの池に逃れ、四九〇人が溺死したと伝えられます。大正十五年に慰霊のために吉原観音像が祀られました。ここ吉原弁財天本宮は新吉原の悲惨を象徴する場所ですが、場内は篤志家の方々によってよく整備されており、清涼感に満ちていることが救いのようにも思われます。

新吉原散策の後、地下鉄入谷駅近くに場所を借り、「角海老楼」「秘書室」「ラヴィアンローズ」の三座、五人ずつに分かれて連句を巻きました。以下に、当日の各座二十韻それぞれの、表四句から裏折立までの五句を転記します。皆様、場の重力に触発されたのでしょうか、なかなかの

力作が詠まれた良い一日であったと思います。

角海老楼の座

二十韻「古地図に残る」

鈴木千恵子 捌

冬ぬくし古地図に残る池の跡

鈴木千恵子

石灯笼に紅葉散り初む

平林香織

名人戦伸びる棋士の手しなやかに

内田遊眠

肌触りよき絹の座布団

佐藤徹心

高楼に兄弟弟子の月愛づる

伊藤江灯

秘書室の座

二十韻「お歯黒どぶ」

宇田川肇 捌

帰り花お歯黒どぶに散りかかり

宇田川肇

木杭の陰に残る虫鳴く

岩崎あき子

先輩は炭の点前もなめらかに

渡辺恵子

形式通り文書手続き

白石一有

描きかけの画架に差し込む月の影

近藤純子

ラヴィアンローズの座

二十韻「弁天堂」

田中秀夫 捌

残照にさざんか映える弁天堂

田中秀夫

夫婦で詣る神の留守の間

武井敦子

組紐の綾を交互に織り上げて

北龍志保子

椅子取りゲーム泣く子笑ふ子

高塚霞

山の湯にゆつたりつかる月の客

山田美代子

令和三年十一月十四日首尾 於下谷KMKビル

## 遠輪廻とは何か

鈴木千恵子

連衆と作品を巻いてきて挙句まで辿りつき、蝶などを詠もうとしたとき。「ウ折端も虫だったから遠輪廻ですね」というようなやりとりがよくある。さらに「ウ折立もナウ折立も天象で、遠輪廻ですね」というような会話。たしかに各面・各折への入り方、その収め方に変化があったほうがよいだろう。けれども「遠輪廻」ということを、特定の場所・素材に限定したものと捉えてはいないか、という提言である。

わたしたちのバイブルともいえる『十七季』に「花の綴目（初折裏の折端）に使った事物を挙句でまた使うと、遠輪廻（略）になる」とある。これは「遠輪廻とは、たとへば前の花に香を付たるに、又桜に香を付る類なり」（『ありのすさみ』享和元へ一八〇一〇序）などを踏まえたものである。この説明は「たとへば」であって、花の綴目と挙句という位置に限ったことではないのである。そして、花に香と桜に香という「付け」が嫌われている。『十七季』の引用で略した遠輪廻の説明は以下の通りだ。

遠輪廻（数句、あるいは面・折をへだてて同じ趣向をくり返すこと）

たとえば、ウ折端に虫を使い、挙句でまた使うとどういふ流れとなるのか。花が定座通りに詠まれた場合、花に虫を添えるという趣向がく

り返されるのである。単に虫という素材に注目するだけでなく、この「同じ趣向をくり返」さないという点が、遠輪廻を避けるために重要であると考えられる。『ありのすさみ』の著者宗順（丈石）は、俳諧辞書『俳諧名目抄』（宝曆九一七五九刊）で次のように説明している。「遠輪廻 前に出でたる付合に又其やうなる付心の句を付るをいふなり。恋に多きもの也。又一句の作意も前に出たる句に似たるは遠慮すべし。「一句」としても前と似ることは避けるべきであるけれども、「付合」を問題としているのである。『三冊子』（元禄十五一七〇二成）にも「又たとへば、花といふ句に、風とも霞とも付て又不可付也（略）如此の類、遠輪廻也」と見える。「又不可付也」とは「また他の場所、花に風や霞を付けてはならない」という意味である。この記述は連歌では二条良基の『連理秘抄』（貞和五一三四九以前成）などに溯れる。

現代（近代）連句にも目を転じてみよう。『連句辞典』には「近代連句入門の手引き」として、かつて緑華亭孝子宗匠と巻いた作品についての明雅先生の鑑賞が載っている。そのナオ三の文章を引用する。

実はこの元々の私の付句は「<sup>にえ</sup>鈍ふかき無銘の刀を秘蔵して」という句であり、自分としても付肌・転じともに自信があったのだが、残念ながら、裏の六句目に「冷く重き掌のgun」という句があり、これもたしかに武器の感触をたしなんで秘蔵している句であっ

た。もちろん、一方は西洋式の近代兵器であり、他は日本在来の刀剣だが、やはり似たところは否めない。連句ではこのように同じ思考・同じ趣向がずつと離れてあらわれるのを「遠輪廻」といつて嫌うのである。

この解説は花の綴目と挙句との話ではないし、単に兵器と刀剣という素材だけでなく、「武器の感触をたしなんで秘蔵している」のが「同じ趣向」であることが丁寧に分析されている。

最後にわたしたちの話に戻る。一昨年末に百韻を捌かせていただく機会があった。七つの月には何とか変化をつけることができた。けれども見直して、

オ七 不可思議と思へるほどに丸き月 たけを

八 軒の干し柿食べ頃になり 未悠

ナオ七 本堂の畳にしみる月の影 肇

八 軒の蓑虫風に揺れる 未悠

どちらも月を賞翫した後に、軒の様子を覗っていた。オ八は「母の干し柿」と校合したのである。百韻の初折と名残の折はとも遠いが、月に軒という付け、軒に目を転じるといふ趣向のくり返しはやはり一巻の流れを停滞させていた。これこそが遠輪廻であると胸を張るようなことではないが、他山の石としていたきたい。

遠輪廻とは、一巻の特定の箇所についていうのではない。また、単なる素材の輪廻というのではなく、「付合」の方法としても一句の仕立て方としても同じ「趣向」をくり返さないということが求められるのである。

第百五十八回例会  
令和四年初懐紙作品 二十韻六卷

雪晴の座

二十韻「をさなごの」 鈴木了齋 捌

をさなごの早きあしどり春隣 了齋  
 フランスパンの先に臘梅 あき子  
 壁越しに工事現場の音聴いて 徹心  
 民謡気持ちよく唄ひあげ 齋  
 潮風の変はる入江に月蒼く あ  
 新酒ラベルに人魚ほゑむ 心  
 金秋のバーで拾つた女達 齋  
 まづ手相から心盗まう あ  
 予想屋の逆の馬券がよく当る 心  
 またも怪しい株の爆騰げ 齋  
 ナオ 水底の河童の村は子沢山 心  
 エイサー太鼓夏空を突き あ  
 草笛を吹くと昼月震へだす 齋  
 通ひ妻でも添ふは嬉しい 心  
 結びあげのうなじをするり珊瑚玉 あ  
 いつのまにやら消えた肩凝り 齋  
 ナウ サポーター付けぬ力士に湧く拍手 心  
 鐘はおぼろに上野大仏 あ  
 豆電車爛漫の花くぐり来る 心  
 ゆらりゆらりと揺らす風船 執筆

連衆 岩崎あき子 佐藤徹心

雪煙の座

二十韻「陽光を」 山田美代子 捌

陽光を背にうけ歩く初懐紙 美代子  
 春着の帯は御所車なり 有子  
 ピラティスの動画みながら真似をして 香里  
 クロワッサンの香り楽しむ 志保子  
 SLの煙まつすぐ満月へ 有  
 ひよつこりのぞく森のうり坊 代  
 そぞろ寒武骨な指の恋しかり 志  
 ハートとハートを潤ほしたいの 香  
 実験にひたすらこもるバンガロー 代  
 時に聞こゆる黄鶯の声 有  
 ナオ 懐かしき昭和の香る佇まひ 香  
 史跡を巡る琵琶湖への旅 志  
 中年の愛はゆつくり熟成す 有  
 二人の時を嘘が生み出し 代  
 凍月に南無阿弥陀仏墨沓ゆる 志  
 熱燗飲んですぐに爆睡 香  
 ナウ 老いてなほあの頃の夢生きがひに 代  
 天へ届けと飛ばす風船 有  
 登りきてやうやく見えた花大樹 香  
 菊菜白和へ友と分けあふ 志

連衆 佐々木有子 式田香里 北龍志保子

雪雷の座

二十韻「福寿草」 江津ひろみ 捌

福寿草小さき稲荷に小さき旗 ひろみ  
 淑気の満つる濠端の風 忠史  
 姉妹難問クイズ出し合ひて 敦子  
 ジャムのレシピをピンで貼り付け 肇  
 月今宵遠回りして帰らうか 史  
 そつと握れば冷えた君の手 み  
 菊枕乱るるほどに匂ひ立つ 肇  
 FA宣言夢のアメリカ 敦  
 するするときだされてる心太 み  
 西瓜の番は年の順なり 史  
 ナオ 紋付をミディスカートにリフォームし 敦  
 陛下のお耳に入れぬ諸事情 肇  
 語る度出逢ひの場面美化されて 史  
 報はれぬ恋今が良ければ み  
 凍月が蒼く射し込む鉄格子 肇  
 クワンクワンと遠き白鳥 敦  
 ナウ エンジンを吹かして飛ばすオフロード み  
 入学式は祖父母出席 史  
 花筵一升瓶を並べをり 敦  
 ビルのはざまに融ける淡雪 肇

連衆 根津忠史 武井敦子 宇田川肇

雪沓の座

二十韻「海ほたる」

平林香織 捌

蓬萊の風吹きくるや海ほたる 香織  
 初荷の船の遠く過ぎゆく 純子  
 友もよし酒も佳しとて賑やかに 美奈子  
 包丁をとり捨てる教鞭 転石  
 行燈の先にほんのり小望月 純  
 溢蚊の刺す白き衿足 織  
 嘘つきに投げつけてやる松ぼくり 石  
 AIなんぞ持ち出して気障 奈  
 ポタリポタソフトクリーム溶けはじめ 織  
 居間の籐椅子猫が独占 純  
 ナオ 辣腕の女首相が勇退し 奈  
 結界を越え愛の故郷 石  
 友の彼素知らぬふりで奪ひ取り 純  
 心の窓を閉ぢて開いて 織  
 月の下独鈷の落つる冬の嶺 石  
 じよんがら節の冴える寒村 奈  
 ナウ 学友と太宰治の墓を訪ひ 織  
 指をなめつつ椿餅食ふ 純  
 八十路きてなほ絢爛の花の夢 奈  
 丘七色に変はる踏青 石

連衆 近藤純子 鈴木美奈子 林転石

雪蓑の座

二十韻「寒なまこ」

御園魚彦 捌

寒なまこ噛み得しことを言祝ぎぬ 魚彦  
 塗り盃にめづる風花 孝子  
 ウインドウに銘ある茶杓飾られて 佳之子  
 良き景となる虫喰ひの穴 洋子  
 満月を仰ぎ古城へ駆け上り 明子  
 紅葉の映ゆる頬に接吻 孝  
 騙すのも騙されるのも身に入みて 全  
 ツカガール行く清く正しく 洋  
 何もかもダイバーシテイ謳ふ世に 全  
 中古住宅今がお手頃 孝  
 ナオ どげう屋のいろはにはほへと下駄預け 佳  
 幫間稼業夏の霜踏み 孝  
 キキといふ名の妓を呼べば太り肉 彦  
 鉄格子のなか愛の讃歌を 孝  
 剃髪をしても浪漫小説家 佳  
 衣に薰き込む香の静謐 洋  
 ナウ 埃及の木乃伊の夢は若きまま 孝  
 傳く猫のアーモンドアイ 洋  
 一步半歩「酔うて候」花明り 彦  
 転勤辞令春塵の中 洋

連衆 坂本孝子 染谷佳之子 大島洋子  
野口明子

雪袴の座

二十韻「言祝の」

山中たけを 捌

言祝の奴正月やはき朝 たけを  
 初風を待ち響く和太鼓 祐介  
 新入幕結ぶ鬚のまだ短かくて 千恵子  
 川べりの店小さき船置く 美智子  
 ウ バザールの終はりを告げる十三夜 介  
 ポツケにそつと隠す椎の実 を  
 明景の片倉館に湯のまろし 智  
 偽名を記す訳有りの連れ 千  
 絡めたり解いたりする指と指 を  
 煌めく驟雨熱を冷まして 介  
 ナオ 琉金の尾が水槽を斜交ひに 千  
 鳥瞰地図を師より授かる 智  
 裏面に赤いハートのシール貼り 介  
 老いて片恋最期まで恋 を  
 往診の山の向かうに寒の月 智  
 一葉の忌に辿るS字路 千  
 ナウ 角打ちにずらりと並ぶ酒の瓶 を  
 すりガラスから淡雪が透け 介  
 白拍子舞ふ神楽殿花の中 千  
 姉と妹で探すてふてふ 智

連衆 和田裕介 鈴木千恵子 聖成美智子

令和四年一月二十三日 首尾  
於 アルカディア市ヶ谷

第百五十七回例会  
芭蕉忌・明雅忌作品 源心五巻

清澄の座

源心「深川に」

坂本孝子 捌

深川に遇ふも懐しきしぐれ哉

孝子

庵のほとりに開く寒蘭

肇

編集部絵本の原画並べぬて

純子

鳴つた電話を誰も取らない

徹心

ポケットの中に何かがある月夜

香里

山葡萄にて染まる唇

心

地芝居の楽屋に呼べばちよんの間で

肇

老師憤怒の一喝をくれ

全

流れゆく真白き雲の涯何処

心

自ら開く外科室のドア

純

歪みたる歩兵戦士のヘルメット

心

後悔はなし飯を喰らへば

里

入れ替り立ち替りして花の宴

純

パソコンスキル変りゆく春

里

ナオ極北の氷河崩れて陽炎へる

肇

司法試験のもう後がない

里

頑な黙秘にかける薄情

肇

長生きすれば話題豊富で

里

何某の王子と呼ばれしこともあり

孝

逢へないほどに募る愛しさ

肇

覗き見る人の恋路よ蔵二階

里

背戸の小藪に郭公の啼く

心

旅に弾く駅のピアノに月涼し

肇

時間つぶしのドライマティーニ

全

ナウ 浮世から帰り支度の啖呵売

心

煮干の頭くれてやる猫

孝

花爛漫裾野の里を彩りて

心

いつとはなしに止るふらここ

純

連衆 宇田川肇 近藤純子 佐藤徹心

式田香里

五間堀の座

源心「風狂の」

大島洋子 捌

風狂の言霊降りよ桃青忌

洋子

静けき道に紅葉散る音

鑑

スケボーの新しい技決めるらん

千恵子

どこの駅でも自動改札

忠史

ウ 悠然と鯉が呑みこむ水の月

あき子

初猟なれど君をキャッチし

洋

うそ寒に互ひの名前入黒子

鑑

丸山町に響く三味線

千

酒の番試飲の量が多すぎて

史

若頭領は博士号取り

あ

AIはどれだけIQ伸ばすのか

鑑

日本の行方誰が占ふ

洋

ミステリーツアーで着いた花の城

史

忍者姿で草餅を売る

千

ナオ 目眩ましにあふみ仏の御開帳

洋

有線放送明日のお知らせ

あ

漁協には河豚によく似た組合長

千

サッカーくじに大当たりする

鑑

人生はいくつもの坂あるといふ

あ

源平蚩湧いてくる溪

史

月覗く浴衣の下の怪しい手

鑑

美女と野獣のベストカップル

洋

産油国続々と建つ摩天楼

史

飛ばされてゆく帽子追ひかけ

千

ナウ 鳥の目でドローン大地を撮影す

洋

農家ランチはおふくろの味

あ

花守は夢の中でも花咲かせ

千

都踊は楽を迎へる

執筆

連衆 荒木鑑 鈴木千恵子 根津忠史

岩崎あき子

森下の座

源心「によつぽりと」

林転石 捌

によつぽりと富士は姿を芭蕉ノ忌

転石

背比べする石路の花

香織

園児らは紐を握つて一列に

俊子

カスタネットをリズム正しく

酔山

ウ 文語文声出して読む月明かり

美智子

契草とてそつと手渡し

俊

貴方へと心づくしの新走

山

待ち伏せをする探偵の影

智

空港へタクシー券を流用し

織

偽のダイヤは指に燦然

智

商店を大会社へと創業者

山

関門の汐東から西

織

花老樹先祖の墓を守りをり

山

寒村の空戻り鳴見ゆ

俊

ナオ読みさしの旅の本置く春火燵

色とりどりの外郎の味

こだりは源泉の水お取り寄せ

霜柱踏み配る新聞

グローブを買つてもらつた誕生日

幼馴染はなぜか独身

馬鹿でした噂話に嫉妬して

あの人が詐欺する筈がない

月を待ち櫛に流るる洗ひ髪

平家蚩がゆらゆらと飛ぶ

ナウ尺八は箏の調べに寄り添つて

仙台平をたたむ内弟子

観世音拝む背中に花は散り

イーゼル立てる軟東風の丘

連衆 平林香織 三木俊子 吉田酔山

聖成美智子

萬年橋の座  
源心「わびさびの」

由井健 捌

わびさびの興致は遙か大根引く

軽トラックでさざんかの道

正座して永字八法習ふらん

頭にのせた眼鏡探せり

ウ 満月の照らし出したる石灯籠

夜露の中をよぎるスカート

角伐の観覧席へお忍びで

旅の宿では苗字偽る

空つぽな寄木細工の箱の内

智

織

俊

織

山

織

俊

智

俊

織

山

俊

織

山

水川きよしの歌ふ新曲

待つてました双子パンダはチョー可愛い

顔はめパネルで記念撮影

花守の命吹き込む御所桜

かたびら雪のちらりはらりと

ナオ 塗腕に蛤ひとつ調へて

磯の番屋に松籟を聞く

天空にゆつたり遊ぶ飛行船

ラガーマンらはハカで気合を

ブロンドと間とり持つ翻訳機

計算外の嬉しおめでた

百名山共に踏破し古希の宴

水琴窟の響く禅寺

月涼しわが思い出のフェルメール

ナウ 新歌舞伎三階席へ宙を飛ぶ

評論家らはなべて辛口

巡り来て夢か現か花の里

歩行者天国うららかな昼

連衆 永田吉文 武井敦子 佐々木有子

高塚霞

白河の座

源心「綿虫や」

箭内敏枝 捌

綿虫や婆は翁に遠きまま

時雨小春日時雨小春日

合の手も入る歌声賑やかに

色鉛筆の止まることなく

霞

健

吉

敦

有

霞

健

吉

敦

有

霞

健

敦

有

霞

吉

有

敦

ウ いとけなき頃より京の初紅葉

露につけても筒井筒思ふ

残り香のかそけき月のやうに消え

ひとつはぐれた珈琲の豆

ほらこれがアラブの壺よお土産の

裸の男煙から出る

祭には里それぞれ伝へあり

円空仏を探す長旅

渡る瀬の綺羅へ散り込む岸の花

暮れて矢のごと雲雀落ち来る

ナオ 羊の毛刈れば一族乾杯す

訥々語る王の伝説

白き帆を上げて鳥陰出づる船

ぎつしりルビーダイヤオパール

汚れても心の奥は触れさせぬ

なめたらいかんぜよ娼婦ふぜいと

羽折れたままの天使のくちづけを

雪の月夜に泣く虎落笛

好きな装丁そろへたる棚

ナウ 沼べりにずらり並んで画架の立ち

春の愁ひを背なに滲ます

来客と花にほどけて笑ふ席

伊万里の鉢に蓬餅映ゆ

連衆 鈴木了齋 山中たけを 北龍志保子

齋

枝

保

を

枝

齋

を

保

枝

齋

保

を

枝

齋

保

齋

枝

保

を

枝

齋

を

保

令和三年十月二十一日 首尾  
於 江東区芭蕉記念館

百日紅の座

歌仙「ついでに」

鈴木了齋 捌

いつせいに生きて死にます蟬時雨 了齋  
 ビール樽据ゑ宴始まる 美智子  
 チュチュ白くアンドウトロワきりもなし ひろみ  
 鏡の部屋に光一筋 江灯  
 三日月に何かを吊す夢を見て 敏枝  
 指のリングに石の冷えびえ 齋  
 鵲のやうに群がるパパラッチ 灯  
 湖畔の宿で逢つたあの頃 み  
 納屋奥に背負子がひそと置かれあり 智  
 もぎたてトマト青臭き蒂へた み  
 草臥れた円座二枚を並べ干す 枝  
 一目で見抜く壺の真贋 み  
 大刀をかざす漢へ冬の月 智  
 城門横のくぐり戸の凍て 灯  
 芸術にルートヴィッツヒは耽溺し み  
 身じろぎもせずただ水に浮く 齋  
 そつと来てひとり浴びたる花吹雪 智  
 触るものみな倒す猫の子 枝  
 ナオ 陽炎のゆらぎ続ける露天仏 齋  
 ちんちん電車先払ひして み  
 旅人に道を訊かるる夕間暮 枝  
 泥棒たちの下見念入り み  
 美しき詐欺師に惚れたヒットマン 齋

秘密ぼろりとこぼす睦言

ふるさとは大北風に海荒れやまず

雪の原野を兎逃げゆく

もつともつと子供のせがむ物語

頭でつかちまだ細き首

山彦の眠る山々月落ちて

有給を取り明日は稲刈

ナウ 歩み行く右に左におどろかし

中に昔のマネキンもある

しばらくはとまどつてゐる付喪神

客の土産の塗物の椀

花衣着たまま濃茶乞うてをり

春の障子に拾ふ糸屑

連衆 聖成美智子 江津ひろみ 伊東江灯

箭内敏枝

み

枝

齋

み

灯

全

み

枝

灯

齋

智

枝

灯

茉莉花の座  
歌仙「花芭蕉」

佐々木有子 捌

陽の光正面に受け花芭蕉 有子  
 葉裏に休む夏のてふてふ 香里  
 特講の階段教室満員に 雅子  
 冷水機には長い行列 俊子  
 銀蟾へ宇宙の旅の夢語る 秀樹  
 腹は減る減る食欲の秋 雅  
 九月場所ひいきの力士横綱に 俊  
 屋形船にて想ひ伝へる 里  
 即興のデュエット唄ふ肩抱いて 俊

薄目をあけて起きぬだら猫

結局は餌係だと自認する

報恩講は祖母と一緒

散居村屋敷林には凍つる月

グーグルマップでルート検索

読み耽るマルコポーロの見聞録

墨書の文字は今もくつきり

若駒の鬣に花降りしきる

時おり腰を伸ばす耕人

ナオ 春空にブルーな気持ち癒されて

年寄りなりの知恵使ふ日々

燃えるごみ燃えないごみや資源ごみ

カラスは山に帰らないとか

着馴らした甚平ほんに心地よき

ほろ酔ひ気分なつてみようか

同級生だった彼女は今の知事

ファンとの恋は深く潜行

隠し子と秘密の金は地獄まで

大学名は人格の外

努力する姿を照らす望の月

べい独楽の父得意顔なり

ナウ 紅の魔除けに飾る鷹の爪

陸上リレー応援の旗

カラーゲンサプリメントのよく売れて

中年過ぎは中を磨かう

花の樹に耳を当つれば神の声

凧合戦の野原広々

連衆 式田香里 武井雅子 三木俊子  
青木秀樹

樹

俊

雅

全

里

樹

有

俊

雅

樹

里

全

有

樹

全

里

有

俊

里

雅

全

樹

雅

香

有

俊





第三十一回  
猫蓑同人会作品 歌仙五巻 1〜2

角筈の座

歌仙「双子のパンダ」 吉田醉山 捌

梅雨入りに双子のパンダ生まれけり 醉山  
 公園の隅皮を脱ぐ竹 ひろみ  
 木管の野外練習きりもなし 千恵子  
 パッチワークの針をすすめる ふみ  
 月光に想ひ拡がる世界地図 純子  
 窓から不意に飛蝗とび込む 千  
 教え合ふ手足の動き阿波踊り ひ  
 休暇明けには交はず目配せ 純  
 蔵の中セピア色したラブレター ふ  
 めつたにぬない三毛猫の雄 ひ  
 鐘が鳴る商店街の籤当たり 千  
 塩で食べると老寿司屋言ふ ふ  
 坂行けば悩み忘れる冬椿 純  
 漱石忌には無私となる月 千  
 四人組バトンをつなぎ疾走し ひ  
 誰にも負けぬママの声援 純  
 花筏つかずはなれず流れ来る ふ  
 農家を継いで慣れぬ畑打 ひ  
 ナオ新しい靴履いてゆく出開帳 千  
 袱紗捌きの鮮やかなひと ふ  
 幾度も数へられたる暁の目 純  
 鉄道模型コレクションする 千  
 ぴつたりと貧乏神と仲よしに ひ

杯をあげれば巴里祭の灯が 純  
 ワクチンの接種相合傘でゆく ふ  
 夢か現か熱き柔肌 ひ  
 笑絵の覗き見してる豆右衛門 千  
 通行止めよこの先の橋 ふ  
 銭湯へタオル一枚月を背に ひ  
 寝転べばただ木の実降る音 純  
 ナウうそ寒に寅さんはまた旅支度 千  
 しつかりしろと鳥ささやき 純  
 予報士が明日も晴れと告げてゐる ふ  
 いつも心に故郷の山 千  
 遠くまで噂の届く花大樹 山  
 光る干潟に潮の香の立つ ひ

連衆 江津ひろみ 鈴木千恵子 中村ふみ  
 近藤純子

淀橋の座  
 歌仙「椿挿す」 武井雅子 捌

籠りみのすさびや垣の椿挿す 雅子  
 梅雨の晴れ間に友よりの文 秀夫  
 アスリート長き四肢持ちしなやかに 霞  
 スケートボード眠る物置 鑑  
 月光に琴の音かすか響ききて 美智子  
 つるりと剥ける枝豆の莢 霞  
 障子貼り穴あけはしやくぐ子供達 鑑  
 覗いてみたいそんな誘惑 雅  
 さりげなく寄り添ふ度に仰け反られ 鑑

ベリーダンスの婀娜な舞姫 霞  
 混信の短波放送聴き分けて 夫  
 帽子の色は特にこだはり 智  
 五番街ショーウィンドウに月凍る 霞  
 雪の基地から宇宙旅行へ 鑑  
 ご先祖の遺訓で開けぬ玉手箱 夫  
 スマホ見ながらあやとりをして 智  
 鳥は知る今花盛る吉野山 鑑  
 凧合戦の武将驕れり 夫  
 ナオ蛤の大きを選び腕仕立て 霞  
 先端技術誇る日本 夫  
 加持祈祷あまびぬを貼る床柱 鑑  
 宝くじには夢がいつばい 夫  
 夏シャツにセシルカット船旅に 霞  
 ナイトキャップで口説く青蚊帳 智  
 薬指元の指輪の跡隠し 全  
 道路建設地盤崩落 鑑  
 勇み立ち賭場に行けどもカモになり 智  
 珠算検定軽く合格 霞  
 野良猫も月の宴に顔を出し 夫  
 風さはやかに校歌斉唱 霞  
 ナウ秋灯す駅より近き師の窓辺 智  
 けんけんばあと路地の奥から 霞  
 老いてなほ日課の散歩欠かさずに 鑑  
 釣つては放す故郷の川 夫  
 花筏水の意のまま揺蕩ひて 雅  
 売れ筋のよき名代草餅 智

連衆 田中秀夫 高塚霞 荒木鑑  
 聖成美智子



百人町の座  
歌仙「江戸の名残」 宇田川肇 捌

角筈や江戸の名残の七変化	肇
でんでん虫は生垣を這ふ	良子
姉妹ピアノ連弾伸びやかに	通齊
うっかりこぼす卓のコーヒー	有子
見上げたる月の入り江に舟を着け	あき子
骨董みがく新涼の縁	良
女房に叱られつつの村芝居	有
送り狼境内に待つ	あ
米寿まで若気の至り繰り返し	肇
裸踊りの奥義皆伝	あ
市庁舎の鐘厳かにニユーヨーク	齊
駐車違反で切符切られる	全

時事句はなぜ「おぞましい」のか  
鈴木了齋

●安易な時事句は「おぞましい」

『猫蓑通信』の初期、創刊号から第四十三号まで毎号、紙面に「質問コーナー」が設けられていた。連句についての様々な疑問に、東明雅先生が答える。このシリーズは全編まとめて猫蓑会オフィシャルサイトに転載されている。『猫

月捕らむと竹馬で行く岬まで	良
見渡す限り凍る寒天	全
染付の蕎麦猪口並ぶ飾り棚	あ
独逸人技師古民家に住む	有
母と子が愛づるパンダに花吹雪	齊
春を惜しみて軽きスキップ	有
ナオ遠近に畑打つ音の響きあて	良
達磨大師の笑ふ掛軸	齊
髪長く瞳おほきな八卦置	あ
手に触れるもの除菌抗菌	齊
餅つきにジヤニーズ系をキャストイング	有
姫始とは嬉し恥づかし	良
皇国の興廢はこの一戦に	肇
御伽噺はひどく残酷	齊
手土産の菓子のは底には札束が	あ
団地中央選挙演説	全

蓑通信』バックナンバーも同サイトですべて閲覧、ダウンロードできる。ぜひ参照されたい。

平成七(1995)年四月十五日刊、第十九号の「質問コーナー」は「時事句」を取り上げている。この年一月には阪神淡路大震災があり、直前の三月には地下鉄サリン事件が起きて、編集後記もその二つに触れている。そういう時期だからこそ、このテーマだったのではないだろうか。先生の回答はまず『俳諧独稽古』(1988年成)から、作品中に詠んではならないものとして、  
慎めよ怪異乱世に火事罪科天災不順不孝不  
忠義

街道の行き着く先の山に月	有
故郷の力士が目指す秋場所	齊
ナウ同窓会新酒の香り味はひて	良
カラオケマイク争奪的	全
子供らのなりたい仕事ユーチューバー	有
読めない漢字どうやって引く	全
花の下詩仙詩聖と詠唱す	肇
牧の泉に憩ふ若駒	あ
連衆 本屋良子 菅原通齊 佐々木有子	
岩崎あき子	

令和三年八月二十七日 首尾  
於 新宿ワシントンホテル新館

近代の貴人の御名官名も夫と知れるは句の上に忌  
四民とも今居る人の名を出さず家々の秘事  
我家の業  
という三箇条を引用している。これらは現在いうところの時事句そのものだ。先生は「こんな遠慮がゆるんだのは、戦後の民衆の意識の変化によるものである」としている。それについて「現代の連句がより自由になり、漸く近代的になったことの一つの証拠」という肯定的な面も捉えつつ、しかし決して時事句を全面的に称揚はしていない。むしろ逆だ。「たとえば、歌

仙一卷の中に時事の句が三つも四つも入つてくると、まるで電車の中で週刊誌の中吊り広告を讀んでいるような、おぞましい感じを否定できない。」としている。「私は時事の句を必ず一卷に一つ詠めと言っているわけではない。前句に即した時事の句が出たら出してもよいというわけ、わざわざ時事の句を出す為に苦勞をすることはないと思う。また、時事の句はやはり歌仙一卷の一つ、あるいはそれに関連して出してせいぜい二句ぐらいで止めるようにしたいと思う。」これがこのコーナーの結論だ。

明雅先生が句作について「おぞましい」などという激しく否定的な形容をされた例は他にないので、明雅先生に入門後、バックナンバーでこれを読んだとき強く印象に残り、その後も折に触れてこれについて考えるようになった。

### ●連句が掘り起こすべきもの

誰でも政治的、社会的、宗教的、その他の意見、偏見、主張、立場などを持つている。私も持つているし、それが図らずも句に出てしまうこともある。しかしそのことに気付いた限りは、なるべく直接的でなく、より一般的な解釈の幅を持つような表現に校正、修正する。

どうしてもそういうことをストレートに主張する必要があると考えれば、他のより有効な手段でそうするだろう。現代にはそうした手段も多様にある。ところが連句は、どう見てもそういうことに向かない表現形式だ。連句中の一句でそんな主張をしても、ごまめの歯ぎしり、小

さな自己満足に過ぎず、連句が持っている本来の可能性を損ねることにはかならないと思う。

人はそういうこととかかわりなく、人として共通の経験や感情を持つている。そういう事柄の方が、一見些細で浅いようでも、人としてより深いところに根差しているのではないだろうか。連句の依って立つ基盤も、新たに一層深く掘り起こそうとすると、そこだと思ふ。

蕉風俳諧の四大理念と言われる、寂さび、撓しをり、細み、軽み、について辞書で確認してみよう。

【寂】(さび) 静かで落ち着いた俳諧的境地・表現美(大辞林第三版)。

【撓】(しをり) 人間や自然を哀憐をもって眺める心から流露したものがおのずから句の姿に現れたもの(広辞苑第六版)。

【細み】(ほそみ) 句の内容的な深さをいい、作者の心が幽玄な境地に入つてとらえる美(広辞苑第六版)。

【軽み】(かるみ) 日常性の中に日常的なことばによる詩の創造の実現をめざす句体・句法・芸境(大辞林第三版)。

これらは社会的な立場とかかわりなく、どんな人にも共通するところに焦点を絞った物事の見方だ。だからこそ芭蕉の周囲には、当時の身分社会のなかで、地位、出身、職業、思想、宗派などの異なる人々が、そういう相違とかかわりなく集い、共に詩的表現を追求できた。江戸時代初期の社会はまだ不安定だったが、蕉風俳諧はそれに左右されずに、全国の各階層に着実に浸透していった。

連衆には、利害や意見の対立する人が含まれることもあったろう。蕉門の俳諧に限らず、連歌系の文芸は初めからそういうものだったに違いない。個人の文芸とはそこが違う。

「修辞法」は古代ローマで、当初は文芸のためでなく、政治上の演説をより効果的にする技術として開発された。洋の東西の詩人は、同時に政治的人物であることも多かった。古代から現代まで、世情や時代についての様々な思想、感懐が詩歌の形でも表現されてきた。

ところが連歌俳諧は、文芸であると同時に一つのコミュニケーションの記録でもある。芭蕉は、一座の連衆に身体の障害を持つ人がいる場合、そういうことを句材にしてはならないと言った。それは障害に限ったことではないだろう。連衆に社会的な立場や意見などについて互いに対立する要素を持つ人が含まれているとき、それを互いにかからさまに句として表現し合ったら、文芸ではなく論争の記録やプロパガンダになってしまう。アメリカには、男が初めてガールフレンドの家を訪ねるとき、彼女の父親とは政治の話をするな、母親とは宗教の話をするな、という格言があるそうだ。座の文芸にもそれと共通する面があるだろう。

### ●「事実」は想像力を束縛する

『去来抄』『修行』編に以下のくだりがある。

草庵に暫く居てはうち破り ばせを

命嬉しき撰集の沙汰 去来

(注：猿蓑「市中は」ナオ十一・折端)

初めは「和歌の奥儀を知らず」と付けたり。先師曰く「前を西行・能因の境界と見たるはよし。されど、直に西行と付けむは手づつならん。ただ俤にて付くべし」と直し給ひ「いかさま西行・能因の面かげならん」と也。

去来の初案は、前句に西行の面影を見いだし、西行が鎌倉で頼朝に面会した折に和歌の奥義を問われ「全く和歌の奥旨を知らず候」と答えた故事をそのまま付けたものだ。今では頼朝と西行のこのやりとりは虚構と考えられているが、当時は「事実」だったろう。芭蕉がこれを「手づつ（拙劣）」としたのは、まさにそこだ。

芭蕉の一直句には、西行や特定の故実を離れた歌人一般の面影としての広がりや深みがある。ナオ折端の次は凡兆が「さまざまに品かはりたる恋をして」という、違う角度からの歌人の面影を付け、その次は芭蕉の「浮世の果は皆小町なり」だ。ナオ折端が「和歌の奥義を知らず候」だったら、こういう展開はなかったろう。

発句は多くの場合、なんらかの現実を背景としている。発句には前句がないからだ。しかし、その後に続く付句はすべて基本的にフィクションだ。今号10ページ、心敬の『ささめごと』からの抜萃に「此の道は、前の句にわが句の玉しぬ（魂）はあるべし」とある。前句をわが魂として発想し、句にするなら、それは「事実」から自由なフィクションでしかありえない。

だが「事実」とは何だろうか。自分が認識する事実も含め、事実とは常に「誰かがある状況の中で認識した事実」でしかなく、絶対に正し

い不動の「事実」などは存在しない。しかも時事関連の事実のほとんどは「誰かからの伝聞」だ。伝聞は必ず途中経路の誰彼の持つ偏見や、特定の利害に基づく意図を含む。公平無私の報道などというものは原理的にありえない。

歴史は常に勝者の歴史だ、ともよく言われる。「事実」を発信する上で勝者が圧倒的な優位に立つ以上、当然だ。だが新たな史的資料は、文字資料にせよ非文字資料にせよ常に発見され続け、それを解析する技術や理論も磨かれ続ける。物事の新たな側面に光が当たるまで数百年以上かかることもあるが、勝者、敗者といったこととは別の要素も含めて「事実」は時間とともに多かれ少なかれ変わっていかざるをえない。

そうした「事実」に全面的に依拠し、伝聞をそのまま句にすることは、創作としての自立を放棄し、そういう変転きわまりない外部要因に作品を委ねてしまうこともある。

「事実」と考えられている物事は人の発想を強く束縛する。そのような前句に対しては、付句も自由な発想を広げにくくなり、前句の「事実」に多かれ少なかれ束縛される。連句一巻のところどころにそういうむくつけき「事実」を挿入すると、それは自由な想像力の連鎖、流れを妨げる障害物になる。「前句を魂として」想を練り、想像力を飛翔させる代わりに、安易に「事実」を持ち込むとそういうことになる。

芭蕉が、伝聞にまると依存した去来の元案を「手づつ（拙劣）」と評して「いのち嬉しき撰集のさた（『七部集』での表記）」という「面影」

の句に一直したのは、それを避けるためだ。

意図してもしなくても、前句があればこれの「現実」への連想を引き出すことはある。そうしたきっかけによる発想でも、その「現実」をそのまま句にするのではなく、より深い「面影」の表現とすることで「現実」の束縛を越えたい。

### ●連歌系文芸は乱世にこそ求められる

応仁の乱で対立した東西両軍の大名、その家中の多くが双方とも宗祇の弟子だった。それ以前も以後も、連歌系文芸が隆盛を迎えた時代は常に、社会も政治も極めて不安定、流動的な乱世だった。それは前号の巻頭に書いた通りだ。

今もまた、世界全体が情報空間として狭くなる一方で、さまざまな対立が生まれ、その対立関係もめまぐるしく入れ替わる乱世だ。私たちは改めて、連歌系文芸の歴史をよくよく噛み締める必要がある。人と人との共通性に立脚し、連句を通してそれを深く追求、表現することができれば、かつてと同じように、人と人を結びつけるその力が再び発揮されるに違いない。

ゆめゆめ、人と人、国と国などの対立や、各種の社会不安など、様々な危機をいたずらに煽るマスコミの言辞に巻き込まれ、それに荷担することのないようにしたい。人がそうした危機に巻き込まれることを取り上げるにしても、焦点を合わせるべきは、そこでの人の姿、ありようそのものだ。そういう「深い」句を、マスコミの見出しやニュースタイトルを引き写すような安易な方法で詠むことは決してできない。



花散里の座

二十韻「ぼつりと一つ」

由井健 捌

眩きのぼつりと一つ帰り花

健

羽を休める凍鶴の群

酔山

蛇皮線の賑やかな音流れ来て

志保子

骨ばつた手で番茶汲みをする

敏枝

月を恋ふフランス窓の文学館

一枝

千草褥に逢瀬嬉しく

健

猪口に寄せ貴方と啜る新走

山

島と繋がる引き潮の道

志

蘊蓄を丁々発止立話

敏

観光バスの席割りをする

一

山鉾は京都の街を睥睨し

健

行水の子ら笑ふ昼月

山

シャガールの思ひ漂ふ青い夢

志

单身赴任紅ひいて待つ

敏

付け文は悪筆ながら愛溢れ

一

断捨離するも臨機応変

健

ナウガキ大将四番打者にてエースなり

山

釣つた公魚天麩羅で喰ふ

志

つづら折り峠の先は花の村

敏

手編みの籠の置かれのどらか

一

連衆 吉田酔山 北龍志保子 箭内敏枝

西田一枝

令和三年十月九日 首尾

第五回猫養会リモート Zoom 5 1~2

葵の座

二十韻「草よりほそき」

鈴木了齋 捌

長月や草よりほそき草の影

了齋

文机浄め十三夜待つ

敦子

さはやかにへのへのもへじ描きぬて

たけを

座りまた起ち走る子供等

太郎

空瓶のころり転がる納屋の奥

敦

蛇と鼠の永き因縁

齋

夏シャツの胸の高さに魅了され

郎

鏡合せのやうな相性

を

どうしても金庫の鍵を開けられぬ

齋

震へ止まらず咳も止まらず

敦

ナオ 巖かに聖燭祭の歌流れ

を

何につけても酒を飲む奴

郎

ささやかなたつきなれども旅に出て

敦

拾ひ集むるそのかみの恋

齋

豪邸の姉妹姉妹に迎へられ

郎

鉄条網に鴟の早贄

を

ナウ 銃声の時折響く末枯野

齋

天気予報を無視と決め込む

敦

今日の日は花の降るまま浴びるまま

を

蛤汁に暮れてゆく海

郎

連衆 武井敦子 山中たけを 功刀太郎

紅葉賀の座

二十韻「涸びたる身に」

由井健 捌

名月や涸びたる身に詩ごころ

健

ブックポストの中に蟋蟀

今朝

理科クラブ茸採らんと山へ出て

有子

香りほのかに残る指先

純子

よろづ屋の灯だけ明るい宿場町

三世子

Uターンにて縁を戻すぞ

健

金継ぎをして初恋のマグカップ

朝

漫画を読めば思ひ出す夢

有

海霧切れてくつきり浮かぶ遠き島

純

天神祭太鼓轟く

世

ナオ 二の膳や三の膳やら杯重ね

健

頑固おやぢはコペルニクス似

朝

君子でもなけれど吾は豹変す

有

襖絵前にさらり脱ぎ捨て

純

月皓皓風花の夜の密事

世

勸進帳はスリル満点

健

ナウ 大跳躍決めて義足のオリンピック

朝

皆が浮かれりや猫も浮かれる

有

惜しげなく散り敷く花を踏みしめむ

純

炉塞ぎの間の神妙な顔

世

連衆 村井今朝 佐々木有子 近藤純子

高月三世子

末摘花の座

二十韻「秋の蝶」

鈴木千恵子 捌

連綿のかな文字をかく秋の蝶 千恵子  
グラデーションを見せる野の色 洋子  
月出れば大工道具を片付けて 酔山  
好みのあてで宵の一杯 蝸舎  
碧眼の法被いなせに人力車 あき子  
清明の術歴女迷へる 洋  
すでもう押さへきれないこのわたし あ  
食べ放題のホテルスイーツ 洋  
少年を集め鍛へる寒相撲 山  
木菟の耳透明になり 洋  
ナオ ケセラセラ誰もわからぬ明日のこと 蝸  
いく度引いても御籤小吉 山  
社長から息子の嫁に見初められ あ  
夏の終はりが恋の終はりに 蝸  
山法師の白に紛れる昼の月 あ  
教授にじやれる柴犬のポチ 山  
ナウ 眠らない都会の人出さまざまに あ  
地下鉄走る地上うららかに 千  
城址のお濠を巡る花筏 蝸  
リュック背負ひて軟東風の中 山

連衆 大島洋子 吉田酔山 岩田蝸舎  
岩崎あき子

賢木の座

二十韻「吸ふほどは」

杉本聰 捌

吸ふほどは吸はせ溢れ蚊打ちにけり 聰  
竹伐る藪に続く柚道 転石  
はらからは栗名月の祝ひとて 鄭和  
眠りから覚め背伸び大きく 志保子  
サンデイエゴ十年ぶりに訪ね来し 志  
どちらも二人連れのどきまぎ 石  
歳の差をとかく噂にする世間 全  
夏の雲雀のかん高き声 和  
ピッケルを置いて清水を一気飲み 石  
散り逝きし人偲ぶ石塔 和  
ナオ 衝立の達磨大師の大きな目 志  
この酒瓶に毒と書きおけ 石  
寒紅を引いた途端に豹変し 和  
窓の凍月弄るべからず 全  
堅持する地球は回るてふことを 石  
蘭亭帖の臨書青墨 志  
ナウ 古伊万里をけふはこれぞと二条城 石  
さても雨水の頃となりたり 和  
花街道抜けて見上ぐる大鳥居 石  
子らの呼ぶ声春の裏山 志

連衆 林転石 高山鄭和 北龍志保子

花宴の座

二十韻「鐘の音に」

小原濤声 捌

鐘の音に足早になる秋の暮 をんみ  
栗名月の覗く山峡 香織  
対岸の竿に鰍がまた釣れて 徹心  
セダンに五人やつと乗り込み 一枝  
白熱の本番前のリハーサル 濤声  
胸の高鳴り裏返る声 み  
校門に隠れて渡す懸想文 心  
商家育ちの如才ないやつ 枝  
葉桜の匂ひほのかに勘定場 声  
蝙蝠の影空を横ぎり 心  
ナオ 少年は鬼ごっこして大喧嘩 み  
威厳を保つ髭はいつ剃る 声  
お嬢様お手をどうぞと膝を折り 枝  
イケメンラガー恋のジャッカル 心  
寒月に早く冷めたるコップ酒 枝  
総裁選に裸済ませて 心  
ナウ しめやかに囚人達と読書会 声  
鶯餅をひとりたらふく み  
媼と翁アルバムそつと閉ちて花 枝  
紋白蝶のふはり窓辺に 心

連衆 福澤をんみ 平林香織 佐藤徹心  
西田一枝

第三十六回国民文化祭わかやま二〇二二  
連句部門受賞作品 三巻

一般社団法人日本連句協会会長賞

二十韻「五殿の千木」 白崎ひろ子 捌

神さぶる五殿の千木や雲雀東風 ひろ子

採れたたと届けられたる独活剥きて 枯野

唐子は踊る呉須の絵皿に 秋扇

川床に灯ぼつぽつ細き月 野

待つてゐますと夏帯の女 ひ

隠れ宿生まれたままの四肢反らし 扇

山を跳び出すハングラライダー 枝

リュウグウの砂大いなる希望秘め ひ

パリ協定の復帰歓迎 野

ナオ暖炉の火きれいに守り父の席 扇

縄目ただしき庭の藪巻 枝

馬の背に虜囚の姫の凱旋門 野

アンドロメケの夜長かなしき 扇

満月に地震の崩れのくつきりと 枝

きちきちに似て隣人の顔 ひ

ナウ角打ちで呑む升酒の盛りこぼし 野

瓶の駄菓子にそぞろ郷愁 枝

校庭の百葉箱へ花ふぶく ひ

海市の旗を見届ける丘 扇

※トロイの王妃

連衆 橋本枯野 梅田君枝 服部秋扇

令和三年二月二十八日 起首

同三月八日 満尾 於 文音

和歌山県の連句を育てる会会長奨励賞  
二十韻「初日の出」 杉本聡 捌

丸窓に青き地球の初日の出 杉本聡

淑気漂ふ宇宙船内 鈴木千恵子

孫娘男児出産こともなし 聡

糸を選んで刺繍針さす 千

見送るやたちまち君を包む霧 聡

愛の迷子を導ける月 千

にがり酒則を越えても進まんと 聡

不可能といふ文字の無い辞書 千

夏籠の僧の眸の真澄みなる 聡

1/f風の音聞く 千

ナオウイルスもミクロの意志を持つ如し 聡

壁に向かつて威嚇する猫 千

雪月夜芝居帰りの回り道 聡

凍てつく指でスマホ操る 千

女スパイコードネームはアフロディテ 全

媚薬に垂らす涙一滴 聡

ナウ夢判断自分の知らぬ自分知り 千

穴を出でたる蛇の生き生き 聡

若の浦に潮満ち来れば花吹雪 千

訪ふてもみんなか補陀落の春 執筆

令和三年一月六日起首 同三十一日満尾

於 文音

ジュニアの部 文部科学大臣賞  
表合せ六句「三が日」 鈴木千恵子 指導

はがき持ちポストに通う三が日 村上鉄太郎

ポッケの左右入れる年玉 村上麟太郎

こち亀がずらりと並ぶ本棚に 麟

猫の足跡続く裏庭 全

ソーダ水月といっしょに一気飲み 鉄

汗のおいはクラスのおい 全

令和三年一月七日 首尾 於 ZOOM



中学二年生で吹奏楽部の、左から麟太郎さん、鉄太郎さん、小学一年生で、最近連句をはじめた妹の咲耶ちゃん

第三十六回国民文化祭わかやま二〇二二  
連句部門受賞作品

●既往（既報）の行事

- ・令和三年六月二十七日、新宿ワシントンホテル新館にて第三十一回猫蓑同人会を開催。
- ・令和三年七月二十一日、江東区芭蕉記念館にて第百五十六回猫蓑会例会（猫蓑総会）を開催。
- ・令和三年十月二十一日、江東区芭蕉記念館にて第百五十七回猫蓑会例会（芭蕉忌）を開催。
- ・令和四年一月二十三日、アルカディア市ヶ谷にて第百五十八回猫蓑会例会（初懐紙）を開催。
- ・以上の興行の作品は、すべて今号に掲載。

●今後の行事予定

- ・四月二十一日（木）に、第百五十九回猫蓑会例会を開催予定。当初は、亀戸天神社藤祭例会として開催する予定でしたが、昨年同様、江東区芭蕉記念館にて春季例会として開催します。
- ・六月二十六日（日）に、第三十二回猫蓑同人会をアルカディア市ヶ谷にて開催予定。
- ・七月二十一日（木）に、第百六十回猫蓑会例会（猫蓑総会）を江東区芭蕉記念館にて開催予定。
- ・十月下旬に、第百六十一回猫蓑会例会を芭蕉忌・明雅忌として江東区芭蕉記念館にて開催予定。あわせて正式俳諧を興行。

●猫蓑会リモート（Zoom）連句会

- ・今年二月十一日（金）に第七回、四月九日（土）に第八回の、リモート会議システムZoomを使った実作会、「猫蓑会リモート」を開催。昨年十月の第五回、十二月の第六回の作品は、今号に掲載しています。

・「猫蓑会リモート」は原則として偶数月の第二土曜日に開催しますが、都合により変更になることもあります。六月の第九回は、第一土曜日の四日に開催の予定です。

●リモート連句講習会を開催します

・パソコンでのリモート（Zoom）連句参加にまだ慣れない方のために、ご希望があれば、奇数月の第二土曜日の午後に「猫蓑会リモート室」を使ってリモート連句講習会を開催します。ごく初歩的な事柄から、執筆（筆記係）やホストを務めるために必要な事柄まで。

・ご希望の方は、平林香織《khira884@gmail.com》宛にメールでお申し込み下さい。その他の「猫蓑会リモート室」使用申し込みも平林まで。

●会員の受賞

- ・第三十六回国民文化祭わかやま2021連句部門  
一般社団法人日本連句協会会長賞  
二十韻「五殿の千木」 捌 白崎ひろ子  
和歌山県の連句を育てる会会長奨励賞  
二十韻「初日の出」 捌 杉本 聰  
ジュニアの部・文部科学大臣賞  
表合せ六句「三が日」 指導 鈴木千恵子  
以上三作品は今号に掲載しています。

●猫蓑基金にご協力ください

- ・基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店  
猫蓑基金 普通預金 3376045

●新会員

- ・上原揺子（ベルギー） 令和四年二月入会
- ・裏谷桃胡（東京都） 令和四年二月入会

●第三十七回国民文化祭・美ら島おきなわ文化祭2022「連句の祭典」募吟にご応募下さい。

・十月二十九、三十日に行われる連句大会「連句の祭典」に向けて作品の募集が始まっています。応募受付期間は、五月十五日（日）まで（当日消印有効）です。一般社団法人日本連句協会のサイト《<https://renku-kyokai.net>》から、募集要項、応募用紙、応募票などをダウンロードできます。

●次号から平常号に戻ります

『猫蓑通信』は第百八・九合併号以後今号まで、刊行間隔が開いてしまったため、二十ページ立て特大号を続けてきましたが、次号から十六または十二ページ立て通常号による年四回刊に戻る予定です。

●「猫蓑通信」バックナンバー

・猫蓑会公式サイト《<http://www.neko-mino.org>》ですべて閲覧、ダウンロードできます。

季刊 『猫蓑通信』第百十六号

令和四年四月十五日発行

発行人 猫蓑会 青木秀樹  
事務局 佐々木有子

〒161・0033

東京都新宿区下落合4・9・34・313

編集人 鈴木了齋

編集委員 奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・

武井雅子・平林香織・御園魚彦

（五十音順）

印刷所 印刷クリエート株式会社